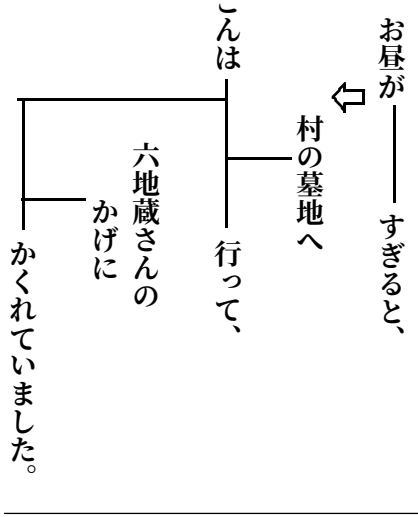
50　お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地蔵さんのかげにかくれていました。
51　いいお天気で、遠く向こうには、おしろの屋根がわらが光っています。　52　墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。　53　と、村のほうから、カーン、カーンと、かねが鳴ってきました。

50　お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地蔵さんのかげにかくれていました。



●兵十のうちのだれかが死んだのだということがわかったごん。だれが死んだかを確かめようと、村の共同墓地へ先回りして待っている。

こんなところにも、ごんがこの村の習慣をよく知っていることがわかる。つまり、この村では、埋葬は村の墓地でおこなわれること、出棺はお昼を過ぎてからなされることを知っての行動である。

また、兵十のうちで確かめるのではなく、墓地でかくれて待たざるをえないところに、ごんのかくれるようにしたくらしぶりの一端があらわれているといえるだろう。

・文50を読む

○　大きく分けると、三つのできごとが書いてあります。
　一つ目は？

六地蔵

六道において衆生（しゅじょう）の苦しみを救うという六種の地蔵。▽その六種については諸説がある。

(1)六道において衆生の苦しみを救うという六種の地蔵菩薩。すなわち、地獄道を救う檀陀（だんだ）、餓鬼道を救う宝珠、畜生道を救う宝印、修羅道を救う持地、人道を救う除蓋障、天道を救う日光の各地蔵の総称。また、延命・宝処・宝手・持地・宝印手・堅固意の六地蔵とする説もある。

(2)六体の地蔵像を安置した寺。特に、京都伏見の大善寺の称。

(3)墓地や道ばたなどに六体を並べて安置した石の地蔵像。

地蔵菩薩は悪世において救済活動を行う菩薩です。菩薩とは大乗仏教では仏陀となるための修行中のもののことをいい、地蔵菩薩は仏陀となることを延期して菩薩状態にとどまり、衆生の苦悩の救済を本願としました。

・　お昼がすぎると
○　そうだね。二つ目は？
・　ごんは、行って、
○　そして、三つ目は？
・　ごんは、かくれていました。
（文図を書く）
○　最初の「お昼がすぎると」から読みましょう。
「～すると」の形が使われいますね。今までも出てきましたが、覚えていますか。
・「兵十がいなくなると、ごんは、ぴょいと草の中からとびだして、びくのそばへかけつけました。27」で、出てきました。
・「ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。16」にもありました。
（そのほかの文がでてきてもいい。）
○　そうだね。
27の文は、どういう意味があったかな。
・　きっかけです。
・　兵十がいなくなったのがきっかけで、ごんは草の中からとびだしました。
○　よく覚えていたねえ。このきっかけには、もう一つ大切な意味があったんだけどなあ。

六地蔵とは六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）のそれぞれにあって、衆生の苦悩を救済する地蔵菩薩のことです。その名称・形像は典籍によって異なりますが、一般には、地獄道を化す金剛願、餓鬼道を化す金剛宝、畜生道を化す金剛悲、修羅道を化す金剛幢、人間道を化す放光、天上を化す預天賀地蔵の総称とされます。日本では平安中期以来、六地蔵の信仰が盛んになり、六地蔵には、寺院・路傍・墓地などに祀まつられた六体の地蔵や、あるいは地蔵堂に祀られたもの、六か所の寺院や堂に安置されるもの、また各所の地蔵尊のうちから六か所を選んだものなどがあります。

ろくどう（ロクダウ）【六道】
仏教で）衆生（シユジヨウ）がそれぞれの業（ゴウ）によって、そこに行って住むことになるという六つの世界。地獄・餓鬼（ガキ）・畜生・修羅（シユラ）・人間・天上。六趣。

・兵十がいなくなったのはきっかけで、ごんがとびだしたわけはかくれていた。
・ちょいといたずらがしたくなったので、兵十がいなくなったのをきっかけに、ごんはとびだしました
○そうだね。よく覚えていた。きっかけはきっかけで、原因はちゃんとほかのところにあるんだったよね。
○では、16の文の場合は？
・発見です。
・ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっているというのを発見したんです。
○すごいなあ。これもよく覚えていたぞ。そのとおりだ。（覚えていなければ、思いだしを簡単にする）
○では、今日のこの「お昼が過ぎると」っていうのは、どっちの使い方なんだろうね。
「お昼がすぎると」「ごんは、村の墓地へ行った」だよね。（文図をさしながら）
・発見じゃない。
・きっかけです。
・お昼がすぎたのがきっかけで、墓地へ行ったんだと思います。
○なるほど。「きっかけ」だとしたら、墓地へ行ってかくれているわけがあるんだよね。それは？

＊・・すると　きっかけ）　既出

9　雨が上がると、ごんは、ほっとしてあなからは
　い出ました。
16　ふと見ると、川の中に人がいて、何かやってい
　ます。
21　しばらくすると、兵十は、はりきりあみのい
　ちばん後ろの、ふくろのようになったところを、
　水の中から持ち上げました。
27　兵十がいなくなると、ごんは、ぴょいと草の中
　からとびだして、びくのそばへかけつけました。

【文法】
①つきそい節の述語が「すれば」「すると」のかたちをとると、一般的な条件をあらわすことができる。
②つきそい節の述語が「すると」「したら」のかたちをとると、過去の個別的な条件をあらわすことができる。このばあい、「トガラ的な関係としては、きっかけをあらわすことがおおい。また、それが発見のきっかけであることもおおい。
　発見のきっかけのばあいもそうであるが、過

・兵十のうちのだれかが死んだというのはわかったけど、だれが死んだかわからないから、それを確かめるためだと思います。
・だれが死んだのか見たいと思ったので、墓地へ行ったんだと思います。
・・・・・・
○よく考えたねえ。そうなんだろうね。
ところで、「お昼がすぎた」のをきっかけにして、ごんは動いているんだよね。何か、わかることや感じることがないかなあ。
次の三つの文を比べて考えてみてください。

①お昼すぎに
②お昼がすぎて
③お昼がすぎると

・①は、お昼過ぎにこうしたっていう、ただの時間みたい。
・いつのことかっていうと、お昼過ぎのことって。
・②は、お昼がすぎて、それからこうしたという感じ。
・順番っていう感じがする。
・お昼がすぎてから、次のことをしましたということ

去の個別的な条件の用法の中で、ふたつのコトガラの偶然的なであいをあらわすものは、ふつうつきそい節と主節の述語動詞のアスペクト形式がことなっている。（16の文）

（日本語の文法99）

「お昼がすぎると」の場合も、「きっかけ」と考えていい。前出のように、このきっかけには、かくされた原因がある。つまり、「お昼がすぎると、村の墓地に行って、かくれていました。」の関係は直接的なようであるけれど、必然的なものではない。「お昼がすぎると、・・・・・ので、・・・・行って、・・・かくれていました。」ということになる。27の文では、直後にその原因が提出されている。ふつう、この直接の原因はかくれているので、それが何なのかを読むことが大切である。

・③は、お昼がすぎるのをきっかけにしてるんだから、なんだか、ごんはお昼がすぎるのを待っていたような感じがします。

・まだお昼がこないかなあと思っていた。

＊ 文9を思い出させてもいい。これもやはり、雨が上がるのを待っていたというごんの気持ちが表されているだろう。

○すごいねえ。そうかもしれないね。

ごんは、兵十のうちのだれが死んだのか知りたくて、お昼がすぎるのを待って、村の墓地へ行った。なるほどねえ。

○あれ？　お昼がすぎるのを待って、墓地に行ったということは、・・・・？　ここにくれば、だれが死んだかわかるということは・・・？　もっと簡単な理由がかくれているみたいだよ。

・お昼がすぎると、葬式の人たちが村の墓地に来ることを知っていたんだ。

・ごんは、前にも、お葬式を見たことがあるんだよ。だから、知ってるんだ。

○そうだね。よく考えたぞ。

ところで、お昼が過ぎるまで、ごんはどうしていた

のでしょう。（フリートーク）

・考えていた。

・兵十の家の近くで、かくれて見ていた。

・人が多いから、兵十の家には近寄れなくなったんじゃないかなあ。

・兵十の家で確かめられないから、墓地に来たんだ。

・葬式のようすは、見られないんだ。

○ところで、村の墓地というのは？

・村の人みんなの墓地だと思います。

○みんなの家のお墓はどう？（愚問・脱線）

・先祖のお墓がある。

・うちの墓だけがあるよ。

・お寺にある。

○今は、たいていみんな、自分の家の墓地というのがあるんだね。むかしは、村の人が同じところに墓地をつくっていたのかもしれないね。ひいおばあちゃんやひいおじいちゃんがいる人は、聞いてみるといい。わかったら教えてね。

○ごんは、村の墓地に行ったんだ。そして、墓地に行って・・？

＊墓地について

ここ美作地方では、家の敷地に墓地をもうけていたようだ。

地方によって様々な形態が考えられるから、共同墓地というのは一般的な姿だとは言い難い。

かくれました。
かくれていました。

前述したように、「～すると」に続く主節が「～している」になった場合には、「発見のきっかけ」であることがふつうである。

・教室にはいると、みんな、そうじをした。
・教室にはいると、みんな、そうじをしていた。

つまり、この場合は、

・お昼がすぎると、ごんは、・・・・・六地蔵さんのかげにかくれました。

・六地蔵さんのかげにかくれていました。
○「かくれていました」でわかることは？
・みつからないようにしています。
・六地蔵さんの後ろにいるんだと思います。
○そうだね。
ところで、「かくれました」ではなくて「かくれていました」になっているね。今までも、「～する」と「～している」のちがいを何度も見てきましたね。
ここでは、何がわかる？
・ずっとかくれていた。
・お昼がすぎてから、長い時間かくれていたんだ。
・お葬式の人たちが来るのを見つけてからかくれてもいいのに、・・・・・、なんで？
（こんな疑問がでてくるとおもしろい。兵十の家、つまり葬式に近づけないごんの所在のなさのようなものがわかるかもしれないし、絶対見つからないようにするごんの用意周到なところがわかるかもしれない。）
○いろんなことがわかったね。
ところで、六地蔵さんというのは？知ってる？
・かさこじぞうに出てきます。
○そうだね。道縁なんかに、六つのお地蔵さんが立っ

という文のほうがふつうなのだ。それが、わざわざ「かくれていました」という継続相をとっているという表現性を読むべきだろう。また、そこには、ごんの性格のようなものも含まれているかもしれない。
＊あるいはまた、語り手から見た場合、お昼がすぎると、ごんがかくれていたのがわかった、ということを表現しているのかもしれない。前文までの場面と、時間的にも空間的にも切り替えるように。

ていて、昔の人は、そのお地蔵さんを大切にしていたんだよ。
（写真や絵を見せるのがいい。また、お寺や、古い町並みや道が残っている地域には、今でも、かなりたくさんの六地蔵が残っている。学区内の、こうした文化財を把握しておくことも大切だ。ただし、それぞれの六地蔵によって、大きさや姿が違っているので、実際に見ることのできる六地蔵がこの物語にそぐわないものであることもあるだろう。それはそれで、教えてやればいい。）
○では、もう一度、この文を読んでみましょう。
わかったことはなんだったかな。
・ごんは、兵十のうちのだれが死んだのか確かめたくて、六地蔵さんのかげにかくれて待っていました。
・ごんは、この村の人のお墓は、みんなここだということを知っているので、先回りして待っていたんです。
・ごんは、だれが死んだのか気になっています。

51　いいお天気で、遠く向こうには、おしろの屋根がわらが光っています。

――いいお天気で、

遠く向こうには、

おしろの　屋根がわらが　光っています。

「いいお天気で」

いいお天気です、の中止形。

文法　中止形

中止形は、とりたてて特別な形ではない。文の中で使われる場合は、先行節と後続節の主語が違う場合は、並べあわせ文（重文）の先行節の述語の役割をするし、主語が同じ場合は、ふたまた述語の一方の述語となる。ただ、その働きには、いろいろある。

●　51.52は、情景だ。

51は、穏やかによく晴れた日で、中山さまのお城の屋根がわらが光っていることが書かれている。

が、これは、単なる情景描写ではなく、ごんが六地蔵のかげにかくれて見ている景色だ。ごんは、どんな心持ちでこの景色を見ているのだろう。

文12～14を思い出すとわかりやすいかもしれない。

文51

○　何のことが書いてありますか？

・いいお天気だ。

○　今の季節は？

・秋

○　秋のいいお天気とは、どんなお天気？

・空気が澄んでいる。

・山などがよく見える。

○　もう一つ書いてあることがあるね。

・屋根瓦が光っています。

・どこの屋根瓦かというと、おしろ。

・遠く向こうには、光っている。

○　「光っています」とすぎさらずで書いてあるね。し

①同じように成り立つ二つのことを並べる

②つづいておこることをあらわす

③前提をあらわす

④先行するコトガラとして、原因をあらわす

⑤後続する動きの場所をあらわす

⑥後続する動きのようすをあらわす

などである。以上の働きについては、機会をとらえて、典型的な例が出てきたときに指導するのがいいだろう。

ところで、この「いいお天気で」の場合は、どれにあたるか。①④の両者が考えられる。どちらともいえない。

ただ、①とした場合、ごんのつぶやき「いいお天気だなあ」と読めないでもな（後述）。子どもからそんな意見が出てきたら、よく考えたと、ほめてやりたいが。

遠く向こうには・・・・光っています。

二格のとりたて

「墓地には」と対になる

遠く→近く　向こう→こっち　→墓地

文法　二格の用法　（※場所名詞抽出）

かも、「光ります」ではなくて「光っています」だ。今までも出てきたよ。どんなことがわかる？

・今光っています。

・ずっと光っています。

・ごんの目で見ている景色です。

○　よく覚えていたね。これは、ごんが見ているんだ。

ところで、「遠く向こうには」「光っています」となっているね。何か感じることない？短くいえば、「向こうに光っています」だよね。

・？？？？

・「向こうに光っています」っていったら、向こうに向かって光っている感じがする。

○　そうだね。でも、「向こうには光っています」にすると？

・そんな感じじゃない。

・向こうの方で光っているということ。

○　そうだね。「向こう」というのは「光っている」何？

・場所。

○　場所だ。ふつうなら、どういうんだろう。（「かごの中にホタルが光る」っていうかなあ」）

・「向こうで、光っています。」っていう。

○　そうだね、ふつうなら、「向こうで光っています」

① 間接的な対象をあらわす
・くっつくところ
・いれる はいる)ところ・のせる はいる)ところ
② 動作や状態のかかわる場所
ありか
移動の到達点
あらわれる場所 消える場所
③ 動作や状態が成りたつ状況
④ 結果やようす、認識の内容
⑤ 補助的な単語とのくみあわせ

遠く向こう」は、場所をあらわしている。その用法は以上の通りだが、光る」という動詞とペアになれる用法は見あたらない。
ふつうは、「に光る」ではなく、「で光る」となる。が、遠く向こうでは、・光っています。」とは、表現性がかなり違うように感じるだろう。
ア、遠く向こうには・・
イ、遠く向こうでは・・
この両者を比較して考えさせてみると、表現している内容の違いがわかりやすいかもしれない。
遠く向こうには」というのは、ただの場所ではなになるんだ。でも、ここでは、「向こうには光っています」と書いてあるね。比べて考えてごらん。

比較
① 遠く向こうには光っています。
② 遠く向こうでは光っています。

・②は、遠く向こうで光っているということだけをいってるみたい。
・①は、遠く向こうには、光っているのが見えるっていう感じがする。
○ ①だと、意味がつけ加わる感じがするね。「向こうには、見える」という意味があるみたいだ。
○ ためしに、「遠く向こうには、」で読むのを止めると、次にくるのはどんな文だろう？

遠く向こうには・・・・・・？

・何があるのかなあ？
・何が見えるんだろう？
○ そうだね。「遠く向こうには」というと、そういうのが続きそうだ。

く、①や④の認識の対象としてあるのかもしれない。つまり、遠く向こうには」で、いったん区切って、今、遠く向こうを見ているんだ、遠く向こうには何があるんだろう、というように。
後述するように、これは、ごんが見ている景色なのだから。

屋根がわらが　　光っています。
この屋根がわらは、光沢のある屋根がわらだ。黒光りしているかもしれない。実際の光景として見ることができるものだから、ぜひ子どもたちに実物で確認させたい。

光っています　継続相・過ぎ去らず
既出のように、すぎさらずで進められている文中の中で、すぎさりが使われている場合は、登場人物の視点であることが多くある。この場合も、ごんの視点からの景色、つまり、ごんが見ている景色そのままなのだ。

いいお天気で＝いいお天気です
とすると、先の中止め、「いいお天気で」そこから、ごんのことが何かわからない？
・ごんは、六地蔵さんのかげから遠く向こうの方を見て、何かないかなあと思っている。
・ごんは、遠く向こうの方で屋根がわらが光ってるなあと思ってみてる。
・何だかのんびりしてる感じがする。
○ ごんは、遠く向こうの方を眺めてるんだ。そしたら、そこに、屋根がわらが光っているのが見えたんだ。
○○さんがいってくれたように、ごんの気持ちもわかるんだね。
○ ところで、ここで「遠く向こうには」となってるんだから、次があるんじゃないの？
・近くには。
・次の文に、「墓地には」っていうのがある。
・ごんは、遠くのほうを見て、次に近くを見てるんだ。
○ よく見つけたぞ。じゃあ、それは次の文のところでまた考えてみよう。
○ ところで、光っているのは何だったかな。
・お城の屋根がわら。
○ 何かわかることない？
・墓地からは、お城が見える。
・お城は遠い。

も、後続節の述語の形に準ずるため、「いいお天気です」というすぎさらずということになる。単に、天気がいいということだけでなく、いいお天気だと感じているごんがいることになる。ごんは、このときはまだ、いつもの好奇心旺盛なこぎつねで、この時点では、すっかりリラックスしているのだろうということが推測できる。

○　屋根がわらが光っているのを見たことがありますか？

・あるある。

・太陽の光があたって、ピカアッと光ってた。

○　そうだね。太陽の光がかわらにあたって反射するんだ。つまり、お天気は？

・いいお天気じゃないとダメ。

○　そうだね。一番最初に書いてあった。だから、お城の屋根がわらが光ってるのが見えたんだ。

ところで、光ってたかわらってどんなのだったか覚えてる？

・黒いかわら。

・つるつるしたやつ。

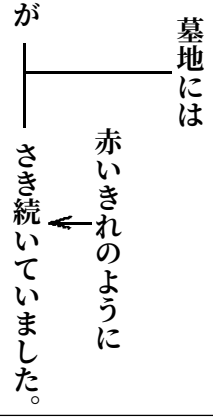
○　ざらざらしたのだと光らないんだよね。お城の屋根がわらは、つるつるしたかわらなんだろうね。

かわらが光るっていうのがよくわからない人は、今度光ってるところがあったら、一緒に見てみよう。知っている人は、見えたときに教えてあげて。

○　では、もう一度この文を読んでください。

○　今わかったこと以外で、何かわかったことがありますか？

52　墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。



墓地には

「遠く向こうには」と対になる

「墓地に・・・・さき続く」という言い方には無理がある。51で説明したように、複合的な使われ方をしているととらえるのがいいだろう。

彼岸花

辞　田のあぜ、土手などに群生する、ひがんばな科の多年生植物。秋の彼岸ごろ、地下茎からのびた茎の先に赤色でしべの長い花が咲く。地下茎は、

●　前文が遠景であるのに対し、こちらは近景。前文で、ごんの姿を浮かべることができれば、ここでは、目の前の彼岸花の美しさに見とれているごんの姿を描き出すことは困難ではないだろう。ただし、ここでは、文末がすぎさりになっている。ごんの視点から離れているようではあるが、「墓地には」という前文からの対になる単語があることを考えれば、ごんの視点ととらえることには抵抗はない。

この美しい彼岸花の赤いきれは、この後、葬列によって踏み折られる。そこにも、情景としての対がある。

○　まずわかることをどうぞ。

・ひがん花が咲き続いていました。

○　それから？？

・さきつづき方は、「赤いきれのように」です。

・どこにかというと、「墓地に」です。

○　前の文でもちょっと出てきたけど、「墓地には」でわかることは？

・今さっきは、「遠く向こうには」で遠くのほうを見ていて、今度は、すぐ近くの墓地を見ています。

・ごんは、ぐるっと景色を見ています。

○　そうだね、ごんは、遠くの景色からずうっと見回し

スイセンに似た鱗茎（りんけい）で、有毒。まんじゅしゃげ。しびとばな。とうろうばな。

ちなみに、新美南吉の故郷では、ごんぎつねの舞台になった場所であるにもかかわらず彼岸花がほとんど見られないということで、最近になって、ボランティアが川岸の堤に彼岸花を移植して、大群生地にしている。

＊花など、実際に提示できる具体物については、実物を見せてやりたい。彼岸花などは、季節のものだから、時期がずれると、実物を見せるということはできないが、せめて、写真で見せることはできる。また、咲いている時期に、絵をかくとか実物をもってきて話をするとか、様々なかたちでふれさせておけば、子どもたちは、容易にその姿を思い浮かべることができるだろう。

きれ

辞 名 ① 切った結果できた小さな物。〃 きれはし。「じま―」… 織物を切ったもの。更に広く、織物。布地。▽ 布」裂」とも書く。

3 裁断して衣服を縫ったり 手ぬぐい シーツ カーテンなどを作ったり することが出来るように一定の幅に切ってある布。反物は、おとなの和服一着分を指す。今日、広義では繊維製品一般を広く指すが、狭義ではズック カンバス ガーゼ 毛布 じゅうたん ガラス繊維の類は除外する〕

～のように たとえ 直喩

さき続いているようすを、赤いきれのようだとたとえている。

さき続く＝さく＋続く

「赤いきれのように」とあわせて、「さき続く」彼岸花を映像化させたい。

ている感じだね。でも、六地蔵さんのかげにかくれてるんだから・・・・？

・六地蔵さんのかげから見える景色を、遠くの方から近くの方まで見ている。

○ そんな感じだね。

で、近くの墓地には何が見えたかというと。

・彼岸花。

・彼岸花が赤いきれのようにさき続いているのが見えた。

○ ところで、彼岸花って知ってる？

・知ってる。

・知らない。

上記参考

○ その彼岸花がただ咲いていたんじゃない。

・さき続いていました。

・赤いきれのようにです。

○ どんな咲き方か、頭に浮かんできますか？

・ずっと咲いている。

・彼岸花がきれのように咲いている。

○ 「きれ」って何だろう？

・布のきれはし。

○ 辞書で調べてごらん。

・着物の帯のように、長いんだ。

・彼岸花が道のようにずっと続いて咲いている。

○ どう？頭に浮かぶ？

どんな感じがしますか？

・とてもきれい。

○ ということは、ごんも？

・ごんもきれいだなあと思ってみてると思う。

・ごんは、見とれてるんじゃないかなあ。

○ そうだね。天気もいいしねえ。

○ では、51・52の文を読んで。

あわせて読んでみて、さらにわかることはありませんか。特に、ごんの気持ちはどうだったんだろう？

・ごんは、とてもいい気持ちで見ていたと思います。

・お葬式のことも忘れていたかもしれません。

・のんびりとした気持ちになってた。

・ごんはいたずらぎつねというより、何だかやさしい感じがする。

○ そうだね、何だかのんびりとしているごんのすがたが見えてくるようだね。ごんのイメージもちょっと違って見える。

53　と、村のほうから、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。54　そう式の出る合図です。

と、
　　村のほうから
　　カーン、カーンと
かねが　　鳴ってきました。

と、　……　「すると、」と同意（接）

文法　すると

前の文の内容が、後の文が成立するための条件やきっかけであることをあらわす

これまでにもでてきた「すると」という条件の形の意味と同じと考えてよい。

当然、前の文とのつながりをあらわしているのだが、この場合、前の文とこの文では条件きっかけを成立させるものがない。とすると、前の文とこの文の間に、「すると」でつながる何かが省かれている

文53・54

● のんびりと景色を見ていると、葬式の出る合図が村のほうから聞こえてきた。ごんは、ふと我に返った。さあ、いよいよ葬列がやってくると、墓地に来たときの気持ちになっている。兵十のうちのだれが死んだんだろうという疑問をときたいという気持ちに。

○　まずわかることは？

・かねが鳴ってきました。

・どこからかというと、村のほうから。

・どんなふうにかというと、カーンカーンと。

○　次の文は？

・それは、合図です。

・そうしきのでる合図です。

・「そうしきの出る合図です」は、「そうしきが出る合図です」に言いかえることができます。

○　そうだね。書いてあることはそういうことだ。では、詳しく見てみるよ。

○　「と、」で文がつながっているけど、ふつうのつなぎことばで言うと何になるんだろう？

・すると　＊上記参照

○　つなぎことばの役割としては、「すると」と同じなことになる。それは、すでにわかっているように、ごんの姿がそこにあるのだ。前の文で、ごんの姿をとらえきれなかった場合は、ここで考えることもできるだろう。）つまり、「ごんはぼんやりと景色を見ていました。」とか、「ごんはそんな景色に見とれていました。」とか。

そのことをさらに裏づけているのが、「すると」ではなく「と」というつなぎことばだ。「と」をつなぎことば（接続詞）として認め、解説している文献は見あたらないのだが、ニュアンスとして、「すると」よりも「と」のほうが唐突な印象を受ける。終わりのほうでてくる、次の文の場合などもそうだ。

そのとき、兵十は、ふと顔を上げました。

と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。

「すると」と「と」の表現性の違いを子どもと考えると、案外簡単に子どもたちは指摘するかもしれない。

また、「すると」が本当の原因をかくしているように、ここでも、「かねが鳴ってきた」原因がかくされている。景色を見ていることとかねとの間には、何ら因果関係はないのだから。

んだ。「すると」というつなぎことばは、今までも何度も出てきた「～すると、～」というかたちの意味とほとんど同じなんだよ。いまさっきも、「お昼が過ぎると、‥‥」というのが出てきたよね。それも思い出して、考えてみよう。

○　「すると」というのは、つなぎことばなんだから、前の文とこれからの文は何か関係があるんだよね。

墓地には、彼岸花が赤いきれのようにさき続いていました。

と、村のほうか、カーン、カーン、とかねが鳴ってきました。

○　彼岸花が咲いていることと、かねが鳴ることと何か関係があるかな？

・ない。

・全然関係ない。

○　そうだね。じゃあ、なにか文が省かれてるんだ。

・？？？？？

・ごんが景色を見ていたことかなあ。

・ごんが景色に見とれていると、かねが鳴ってきた。

○　そうだ。前の文でわかったのは、景色のことだけではなくて、それを見ていたごんのことがあったんだよね。そのごんの姿が前にあって、

鳴ってきました

近づき態
文5参照

【文法】 ここまでにでているのは、「こちらへ近づく移動」がほとんどだった。

ところが、ここでの 鳴る」というのは移動をあらわす動詞ではない。それに くる」をつけて、鳴ってくる」というのは不自然な表現だ。たとえば、チャイムが鳴ってくる」というだろうか？また、「してくる」の多くは 「していく」が対応するが、鳴っていく」とはいわないだろう。）

近づき態には、次のような用法がある。

A、ちかづくウゴキをあらわす用法

①ある動作をしてから近づくことをあらわす。

②あるウゴキや状態をしながらくることをあらわす。

③こちらへのちかづく移動やはたらきかけをあらわす。

B、動作や変化のあり方をあらわす用法

①発生の過程が生じ、すすむことをあらわす。

②変化の過程がすすむことをあらわす。

③その時点までウゴキがつづくことをあらわす。

ここでは、Bの①が該当しそうだ。たとえば、雨がふってきた。」のように。しかし、これは、雨がふりはじめた」と、内容的には同じだ。では、鳴ってきた」は 鳴り始めた」と同じだろうか。

また、Aの③には、音が聞こえる場合がある。鳥の声が聞こえてきた」のように。ここでは、がねが聞こえてきました」ととらえてもいいかもしれないが、どうだろう。

ただ、もっとも表現通りに読めば、かねの音をモノとしてとらえ、村のほうからごんのほうへ近づいてきたということになるのかもしれない。遠くで鳴らすかねだ。ごんが待っていたかねだ。小さな音だろう。それが、墓までとどいたのだ。ごんは、村で鳴らすかねも近くで聞いたことがあるだろう。その音もごんの脳裏にはあっただろう。

しかし、どれも、解釈でしかない。どの読みがもっともこの形象としてふさわしいか、子どもと一緒に模索すればいいだろう。

すると、村のほうから・・・・・

ということになりそうだね。

○ ところで、「すると」と「と」は同じ意味があるといったけど、どこかが違う感じがする。比べて考えてみて。

墓地には、彼岸花が赤いきれのようにさき続いていました。

（ごんは、そんな景色をぼんやりと見ていました。）

すると、村のほうか、カーン、カーン、とかねが鳴ってきました。

と、村のほうか、カーン、カーン、とかねが鳴ってきました。

・「と」の方が、急な感じがする。

・突然っていう感じがある。

・びっくりした。

○ そうなんだね。「と」というのには、今言ってくれたようななかみがつけ加わっているような感じがする。

そこには、ごんの気持ちがあるみたいだね。

どんなことがわかる？

・かねが鳴ってきて、ごんはびっくりした。

・ごんは、景色に見とれていたので、どきっとした。

・ごんは、ふと我に返ったんだ。

○ そう、こういうのを我に返る、というんだ。

○ では、書かれていることをもう少し詳しく読むよ。

「かねが鳴ってきました。」と書いてあるね。「かねが鳴りました」ではない。

「～してくる」というのは、これまでも出てきたけれど、それを思い出して、何かわかることはない？

・かねの音が、こっちへ近づいてきてる。

○ かねの音が近づくというのは、どういうこと？

・だんだん、かねの音が近づく。

・でも、音は小さいんじゃないの？ふつうの近づいてくるだったら、だんだん大きくなるじゃん。

・かねの音が、ごんのところまで届いたっていうこと。

○ なるほどね。そういうことかもしれない。

でも、ふつうは、「かねが 鳴ってきました」とはいわない。ふつうだったら、「村のほうからかねが・・・」？

・聞こえてきました。

○ そういうのがふつうだ。

それが、わざわざ「鳴ってきました」と書いてあるんだ。どんな感じがする？

〔そう式の―― 出る〕
↓
（それは） ――合図です。

そう式の出る〕＝そう式が出る

規定語的つきそい文

合図です　　すぎさらず

既出のすぎさらずの表現も参照。

【文法】 この場合は、「かね」の性質を説明する名詞述語文としてとらえればいいだろう。つまり、一般的に既知の、「とき」に拘束されない説明文として。ためしに、過去形の文にすると違和感を覚える。

そう式の出る合図でした。

ただ、既出の用法通りに読むと、ごんの気持ちが反映されてくる。つまり、ごんの立場からの説明ということになり、「おっ、いよいよやってくるぞ。」という、ごんの気持ちが読めないでもないのだ。

これも、子どもと一緒に考えればいい。

・かねが自分からやってきてるみたい。

・？？？？

○ じゃあね、それを考えるためにも、次の文を読んでみるよ。

そうしきの出る合図です。

これは、はじめに言ってくれたように、そうしきが出る、合図です。ということなんだね。

何が、かというと？

・かね。

・カーン、カーンというかねの音。

○ そうだね。鳴ってきたのは、そうしきの出る合図だ。

・ごんにも知らせてる感じがする。

○ ところで、ここもすぎさらずで書いてあるね。「そうしきの出る合図でした。」ではない。

何かわかることないかなあ。

・そうしきの出る合図だ、とごんが思った。

・ごんは、合図のことを知ってるんだ。

・いよいよそうしきの人が来るぞ、という気持ちになってる。

・ごんは、もともと兵十のうちのだれが死んだか知りたくて、ここで待ってるんだから、やっとその時間がきたっという感じ。

○ すごいなあ、よく考えたね。

そういう気持ちがごんの中にあったのかもしれないね。

○ ということは、わざわざ「鳴ってきました」と書いてあることで、何かわかることはない？

・ごんに、教えてくれてる感じがする。

・ごんのために鳴らしてるんじゃないけど、ごんにも知らせにきたという感じ。

○ そうだね。ただ「聞こえてきました」というのより、ごんに教えるというような感じが強い気がするね。

だから、村のほうからここに「鳴ってきた」ということになるのかな？

○ この合図は、村の人みんなにお知らせするかねなんだろう。葬式に出ていない人にも、これから葬式の列がお墓に向かって出発するぞっていう。ほんとは、村の人にお知らせするんだけど、かねの音は人だけじゃなくて、ごんにもほかのものにも同じように聞こえてくるんだよね。ましてや、このときのごんにとっては特別だったんだ。

○ では、最後に、文50からここまでを読んでください。

新しくわかったことがあったら教えてください。